

ジョイフル コミュニケーション!
Salesian Bulletin Japan

ドン・ボスコの風

No.
18
January
2017

特集

身近にある 子どもの貧困

今、私たちにできること

— 連載インタビュー ドン・ボスコの教え子たち —
ノンフィクション・ライター **飯島裕子さん**

— 新コーナー ドン・ボスコのトモダチが暮らす街 —
デイリ / 東ティモール民主共和国

— 新コーナー サレジオン スクールライフ! レポート —
アジア高校生サミット in 宮崎

— 新コーナー つながれ! サレジオ青年 SYM JAPAN —
SYM青年 上五島巡礼 / 被災地訪問 **熊本** / ジュビレオ青年徒歩巡礼 in **浜松**

— 新コーナー サレジオン ピープル —
ランド・ミットリさん

— サレジオ家族探訪 —
サレジオ工業高等専門学校

— 新コーナー ファミリーメンバーインタビュー 今、私「〇〇」しています! —
ガンディ・カッラサン神父

— サレジオンライフストーリー— ドン・ボスコのように生きる —
ありがとう! 古木眞理一神父 大らかで情に熱い人



どんな境遇の子どもたちも、心からの笑顔で、希望をもつて歩めるように

1964年の東京オリンピックの年、8歳だった私は両親と兄弟4人と共に、大分の佐伯という小さな町から船に乗って南米アルゼンチンへと移住しました。当時の日本は貧しく、多くの道路は舗装されず、機関車は黒い煙を吐いて走っていました。

41歳になった1997年、私はすっかり浦島太郎になったような気持ちで日本へ帰ってきました。東京オリンピックの後、日本は目覚ましい発展を遂げたようです。日本社会はバブルが崩壊して新しい時代を迎え、南米からも多くの出稼ぎの人たちが日本に来ていることに驚きました。その後、日本はさらに経済的に厳しい時代となり、都会でも地方でも、若い夫婦は共働きしないと生活できず、家族と子どもが過ごす時間や家庭環境も大きく変わってきました。子どもたちは家に帰っても、両親が仕事に出ているので独りぼっちなのです。子どもたちには、安心して友達と遊べる場や、スポーツで気持ちのよい汗を流せる場が必要です。

ドン・ボスコは、寂しさを抱えた貧しい若者のために、若者たちの家であるオラトリオを始めました。これがサレジオ事業のルーツです。今、日本のさまざまな場所で、多くの善意ある人たちが、聖霊の働きによって、貧困の中にある子どもたちのために働いています。子どもたちが放課後に安心して過ごせる場所を提供し、一緒に遊ばせ、悩みを聞いたり、勉強を教えたり。サレジオ家族の私たちも、こうした働きを見る時、神様からの呼びかけを感じます。サレジオ会がカトリック横浜教区から委嘱されている浜松教会や大和教会では、滞日外国人の子どもたちが遊んだり勉強したりできる場を提供しています。

サレジオ家族の皆さん、同窓生、恩人の皆さん。どんな境遇の子どもたちも、心からの笑顔で、希望をもって歩める日が来るまで、ドン・ボスコからの呼びかけ、神様からの呼びかけに、一緒に応えてまいりましょう。

サレジオ会日本管区長

マリオ 山野内 倫昭 神父

2017年1月1日 神の母聖マリアの祭日に



2016年9月、四日市サレジオ志願院の志願生たちと山野内管区長。カトリック浜松教会を訪問して。

まりお やまのうち みちあき

1955年大分県佐伯市生まれ、61歳。8歳の時、家族とアルゼンチンへ移住。29歳で司祭叙階。アルゼンチンの哲学院で哲学・社会学などを教え、司牧担当・院長・アルゼンチンとパラグアイ6管区の修練長を経て、1997年（41歳）帰国、日本のサレジオ会員として働く決意をする。育英高専・杉並支部院長、調布サレジオ神学院院长、副管区長・サレジオ家族担当・養成担当を務め、2014年12月より日本管区長。趣味はギター演奏。

4 特集 身近にある子どもの貧困 今、私たちにできること

10 連載インタビュー
ドン・ボスコの教え子たち ノンフィクション・ライター 飯島裕子さん
「貧困は“遠くで燃えている火”だと思っていた」

12 新コーナー ドン・ボスコのトモダチが暮らす街 Don Bosco Amici
デイリ／東ティモール民主共和国

14 新コーナー（ Salesian People ） サレジアンピープル 世界そして日本のサレジアンな人たちを紹介します。
ランド・ミットリ さん /中東管区/シリア・アレッポ

18 サレジオ家族探訪 Visit the Salesian Family
サレジオ工業高等専門学校 東京都町田市小山ヶ丘
日本で唯一の工業系ミッションスクール

20 新コーナー つながれ! サレジオ青年 SYM JAPAN Salesian Youth Movement Japan
SYM青年 上五島巡礼 /被災地訪問 熊本 /ジュビレオ青年徒歩巡礼 in 浜松

24 新コーナー サレジアンスクールライフ! レポート 『アジア高校生サミット in 宮崎』 日向学院中学校・高等学校 (宮崎県宮崎市)

30 新コーナー ファミリーメンバーインタビュー 今、私「〇〇」しています! サレジオ会司祭 ガンディ・カッララサン神父
「物理学の博士号」をとるために「勉強」しています!

31 サレジアンライフストーリー ドン・ボスコのように生きる
ありがとう!古木眞理一神父 大らかで情に熱い人

16 世界のサレジオ家族ニュース / 26 サレジオ家族 国内ニュース / 29 サレジオ情報募集

今号の表紙



ある冬の日の夕暮れ、街の駐輪場に佇む1人の少女。母親を待っているのか、友達もなく寂しさを募らせているのか。今号の特集テーマ「身近にある子どもの貧困」は、見た目やその姿からはわかりにくい。



ドン・ボスコとは?

「青少年の友」と呼ばれ、助けを必要とする若者たちのために生涯をさげた神父。1815年イタリア生まれ、名前はヨハネ（イタリア語でジョヴァンニ）。ドン・ボスコは「ボスコ神父」の意味）。青少年教育に献身するサレジオ会を創立。1888年帰天。1934年列聖。

サレジオ家族とは?

ドン・ボスコの精神を受け継ぐ修道者・信徒・協力者たち。世界130以上の国で、30団体、40万人以上のメンバーが、学校、教会、社会生活のさまざまな場面で青少年や貧しい人びとのために奉仕している。サレジアンファミリーとも呼ばれる。

サレジアン・ダイアリー vol.01



「劇軽な返答」

いたずらな私は、手や脚に包帯を巻いている若者を見ると、質問せざるにいられない。「どうだ?……母さん、思いの外手強かったろ?」大抵は「はい、もう二度と逆りません」などの劇軽な返答を得られるのだが、時々失敗する。いかにモ心外といった表情で「僕は、お母さんにそんなことしません!」と訴えられると、己の罪深さすら感じてしまう。ところが先日、凝りもせずに「だから母ちゃんに逆らうなって言っただろ」とやったところ「母さんじゃありません!」ああ、またやっちゃまったと思っていたら「父さんです!」と続いて、不謹慎ながら爆笑してしまった……。成長段階の確実な消化、結構至極。だが少年よ、他の表現方法も手に入れような。



榎本 飛里 神父
えのもと ひさと

1963年生まれ、53歳。2011年4月よりサレジオ学院カテキスタ担当。趣味はギター。

特集

身近にある 子どもの貧困

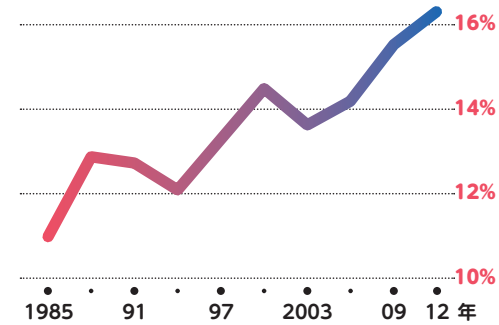
今、私たちにできること

今、子どもの貧困が深刻化している。厚生労働省の調べによると、2012年時点で17歳以下の子どもの貧困率は16.3%。じつに6人に1人が貧困状態にあるのが現実だ。しかも1980年代頃から30年間、貧困率は上昇し続けている(図1)。

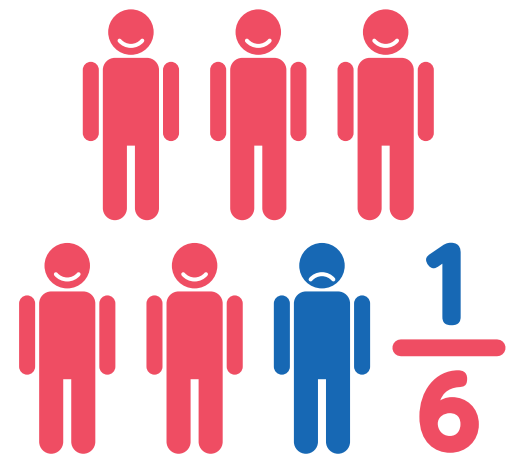
貧困で苦しむ子どもたちは今、どこでどのようにして生きているのか? なぜこのようなことが起きているのか? 私たちがすべきことは何だろうか?

●取材・文／編集部
●協力／白旗真生 (NPO法人青少年の居場所Kiitos)、結城康博 (淑徳大学教授)

(図1) 子どもの相対的貧困率の推移



子どもの貧困率を示した図。2012年時点で16.3%、日本の子どもの6人に1人が貧困状態だ。(『平成27年版 子ども・若者白書』内閣府)



「この子に居場所を……」

「Aさんは、小学校中学年の自我が芽生えた頃から、母親の養育放棄が始まり、それから2～3年の間は、自室から布団を取り上げられ、電気を止められ、食事も与えられずにいました。親との関係が破綻(はくたん)していました。」

NPO法人「青少年の居場所Kiitos」(東京都調布市)の代表を務める白旗真生さんは、そこへやってくるひとりの中学生について、柔らかな口調で語る。

「ただ、Aさんが在籍していた中学校の担任の先生が、Aさんの自宅へ、頻繁に菓子パンなどを差し入れてくれました。その先生と、子ども家庭支援センターの方と一緒に、Aさんは中学2年生の時に、初めてKiitosにやってきました。Aさんに初めて会った時の人を射るような目つきは、未だに忘れられません。Kiitosに来るようになり、少しずつ他の子どもたちと話ができるようになりました。大人との会話は、まだ難し

いのですが、時々、優しい目をすることもあります。今後は、大人と話ができるようになり、就労につながることを願っています。」

Aさんのように、生きづらさや困難を抱えた中学生から20代の若者たちが、Kiitosに集まってくる。来る時間も、帰る時間も、頻度もばらばら。プログラムも一切ない。しかし、利用者の数は年々増えていると言う。

「貧困」ってなに?

一口に「貧困」と言っても、人によってそのイメージは異なる。先進国では「貧困」について議論する際、2つの定義が用いられる。(図2)

絶対的貧困

まず1つ目の定義は、「人間として生きるために最低限の生活を送ることができない状態」だ。ストリートチルドレンや、飢餓に苦しんでいる子どもなど

がこれにあたる。「貧困」と聞いて、多くの人はこのような子どもたちの姿を思い浮かべるのではないだろうか。時代や場所に関係のない絶対的な指標として、これを「絶対的貧困」と言う。

相対的貧困

2つ目の定義は、「社会において『普通の生活』を送ることができない状態」だ。絶対的貧困に対し、これを「相対的貧困」と言う。

相対的貧困にあたるのは、OECD(経済協力開発機構)が定めた一定基準(貧困線*)を下回る世帯だ。具体的な目安は、手取り収入が4人世帯で244万円/年、3人世帯で211万円/年、2人世帯で173万円/年となっている。

*貧困線：世帯の手取り収入を世帯人数の平方根で割った額である「等価可処分所得」の中央値の半分の額。

貧困は親から子へ続く

なぜ、日本で貧しい子どもたちが増

(図2) 絶対的貧困と相対的貧困

絶対的貧困

人間として生きるために最低限の生活を送ることができない状態



相対的貧困

社会一般の「普通な生活」を送ることができない状態



えているのか？ 淑徳大学教授の結城康博さん（サレジオ学院同窓生）は、親から子へ引き継がれる「貧困の連鎖」に着目する。

「学校以外での教育機会に恵まれれば、それだけ受験には有利になります。経済的に厳しい家庭では塾に行く費用を工面できず、幼いときから習い事やゆとりのある文化的な暮らしからは縁遠くなる。このような家庭環境の違いが、教育格差を増長させる傾向は顕著になってきています。」

つまり、親の年収格差によって子どもの教育機会に差が生じ、その子どもが高学歴を有すれば就職の選択肢が広がり、収入も高額になる可能性がある。これは所得の高い階層の子どもは将来さらに豊かになり、不利な状況にある階層の子どもは、将来ますます厳しい状況に陥ってしまうという、貧困の連鎖を招く要因になる。



結城康博さん

貧困を抱えた親たちは

では、貧困状態にある子どもの親はどのような問題を抱えているのだろうか。そこには次のような傾向がある。

がんばって働いても……

総務省「労働力調査」によると、1984年には労働人口の15.3%だった非正規労働者*が、2015年には37.4%と急増。その影響から、2000年には年収200万円以下の労働者が18.4%であったのに対し、2016年時点では24.1%と、低所得者層が増加している。

非正規労働は「雇用が不安定」「給料が安い」という特徴があるが、家計を支える大黒柱でも非正規労働者であるケースが増えている。また、労働現場におけるハラスメントや長時間労働、それに伴う病気の発症など、多くの労働問題が背景にあるため、働きたくても働けない人が増えているのも現状だ。

*非正規労働者： アルバイト・パート労働や契約社員、派遣社員など、正社員でない労働者全般を示す。

ひとり親家庭の苦しさ

ひとり親家庭の相対的貧困率は2012年時点で54.6%と非常に高い。

たとえば、ひとり親が子育てをしながら働くために時間のやりくりがしやすい非正規労働を選んだ場合、1つの仕事では家計を維持できないため、2つ3つと掛け持ちし、働きづめになるケースもある。これでは、親子で共に過ごす時間が限られてしまい、子どもが孤立してしまう。

母子世帯等調査によると、ひとり親になった理由として離婚が8割を占め、未婚の母も増加傾向にある。離婚の理由は「性格が合わない」を筆頭にさまざまだが、DV（ドメスティック・バイオレンス=家庭内暴力）の苦しみを抱える人たちが多いことも注目される。2014年の内閣府調査によると、既婚女性の5人に1人がDVの被害経験をもつという。ここで言う暴力とは、身体的暴力のみならず、精神的・性的・社会的・経済的暴力など幅広い要素が含まれる。暴力の問題は「虐待」という形で立場の弱い子どもにも及ぶことが多く、ひとり親の道を選択せざるをえない家庭もある。

見えにくい貧困

現代の貧困は、路上で子どもが泣いているようなわかりやすいものではない。多くの子どもがスマートフォンを持

ち、普通の子どもと変わらない格好をしている。それゆえ、私たちからはその貧困の様子が見えにくい。このような事情から、彼らにアプローチするのが難しいのが現状だ。

彼らの世話をするために 手をさし伸べる人がいれば

ドン・ボスコの時代、イタリアでは産業革命の影響で、多数の若者たちが農村を離れ、仕事を求めて大都会に流入していた。教育も受けず、劣悪な条件の中で過酷な労働を強いられる若者たちは、暇があると道に群がり、暗い表情で悪事を働いていた。その有様を見てドン・ボスコは深く心を痛め、「彼らが自分たちの面倒を見てくれる友を一人でも持っているのなら」と思い、自ら行動を起こして貧しい青少年の世話をしにいった。これがサレジオ家族の出発点である。

今、ドン・ボスコがこの日本の現状を見たら何をするだろうか？ 私たち一人ひとりがドン・ボスコに倣って何ができるだろうか？ 待っているだけでは始まらない。まず青少年の貧困の現状を知り、自ら近寄って行って行動する勇気が求められている。



“私は一人の貧しい神父にすぎない。
でもこれから先、
たとえ一切れのパンしか持っていないときでも
それを君と半分こするよ。”

『心が強く優しくなる ドン・ボスコのことは100』196頁

「多くの家庭が痛ましい状況にあります。
深刻な危機の中にある人びとに共感し、
理解し、寄り添う力を大きく育てましょう。」

サレジオ会総長
アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父
「ストレンナ2017」ビデオメッセージより





現場を見つめる

NPO法人 青少年の居場所 キートス Kiitosを訪ねて

都心に近く、住みよい住宅地として知られる東京都調布市にあるカトリックサレジオ神学院ユースセンター内に、NPO法人「青少年の居場所Kiitos (以下Kiitos)」はある(2016年12月時点)。フィンランド語で「ありがとう」の意味をもつこの場所に、生きづらさを抱えた10代20代の若者たちが集まっている。

学校に行けない、家に居場所がない……。毎日に苦しむ若者たちが飛び立てるように、疲れた羽を休める「止まり木」として心と体を安らげている。Kiitosを訪ねて取材した。

「私たちは、“居場所”を提供しています。ここは安心していても大丈夫だよ、という場所にしたいと思い、Kiitosを始めました。今は、居場所・食事支援・学習支援・相談事業の4本立てで活動しています。」そう語るのは、Kiitosの代表を務める白旗真生さん。

「ここには中学生から20代の健常の子、そして知的・発達・精神障害のある子もいます。共通しているのは、みんな生きづらさを強く感じていることです。」

彼らの親は、子どもを思い通りにできずに、暴力をふるう。子ど

午後6時頃のキートス正面玄関。子どもたちが来る時間も、帰る時間も、頻度もバラバラだ。利用料は無料。運営は補助金と有志の寄付によってまかなわれている。ここはかつて、サレジオ会の司祭を目指す神学生・志願生たちが子どもたちとかわる場でもあった。



お菓子やフルーツを手にとって談笑したり、パソコンやゲームをして遊んだり、思い思いの時間を過ごしている。



居場所づくりと食事支援を行っていく中で、「この子たちには教育が必要なんだ」と感じた白旗さん。現在では希望する子どもたちに、教育経験のあるボランティアがマンツーマンの学習支援を行っている。



この日の夕飯は天ぷらうどん。調理担当のボランティアが毎回20食ほど用意して、子どもたちを待っている。

もの障害を受けいられず、ネグレクト(養育放棄)をする。アルコール依存症のため、夜な夜な繁華街に子どもを連れまわす。こうした問題は子どもたちに降りかかってくる。

白旗さんがこの活動を始めたきっかけは、中高生が通う児童館の相談員をしていたときだった。

「その児童館では、18歳になると利用できなくなるんです。でも、厳しい状況のまま就職もできず、『この子たちは明日からどこに行くのかなあ』という思いがずっとありました。それで、退所する子全員に私の携帯電話番号を書いてお手紙を渡してみたんです。すると、『話がしたい』とたくさん電話が来ました。私はファミリーレストランで、電話をくれた子どもたちと会って、彼らの話をずっと聞いていましたよ。

話を聞いているうちに、『やっぱり彼らの居場所をつくらなきゃいけないなあ』と思って、アパートを借りたんです。」

初めて若者の居場所となるアパートを借りたものの、やってくる子どもが増えたことや資金不足のため、6年間で4度の引っ越し。現在はカトリックサレジオ神学院のユースセンターに場所を構えている。

Kiitosの入口にある階段を上ると、5つの部屋が見渡せる。畳の部屋では、子どもたちがゲームをしたり漫画を読んで寝転がったり。キッチンではボランティアのスタッフが子どもたちと話しながら、夕食の準備を進めている。Kiitosの日常風景だ。

自治体や支援団体からの補助金と一般からの寄付、60人を超えるボランティアスタッフで運営しているが、今後は有償でのスタッフも検討している。

「今は無料で場所を貸していただいているので、若い人を少し雇えるんです。教員をしていただければ、『若者の支援がしたい』と言って舞い込んできた人もいます。若者の居場所であり続けるために、何年経っても普通のおうちでありたいですね。」

**NPO法人 青少年の居場所
Kiitos (キートス)**

開室時間: 月・火・水・木・土
11:00~18:00

休室日: 日曜・金曜・第3月曜

東京都調布市富士見町3-21-12
サレジオユースセンター内
<http://kiitos.org>

<寄付のお願い>

サレジオの基金 DBK [ドン・ボスコ基金] では、NPO法人 青少年の居場所 Kiitosの活動を支援しています。ご寄付くださる方は、下記の振込口座まで(または本誌とじ込みの払込用紙にて) お振り込みください。

郵便振替口座番号: 00190-5-292253
加入者名: ドン・ボスコ基金

※通信欄の寄付意向に☑チェックを入れて、寄付金額をご明記ください。寄付者氏名の非公表をご希望の方は、払込用紙に「匿名希望」(☑チェックマーク)をご記入ください。

NPO法人 青年の居場所Kiitos代表

白旗 真生 さん

しらはた まき

1949年、山形県生まれ。国立音楽大学卒業後、ピアノ教室を開き、多くの生徒を指導。子どもに関わるには専門性が必要だと感じ、40代で大学に入学、心理学を専攻する。その後児童館でのカウンセラー等を経て、2010年NPO法人 青少年の居場所Kiitosを設立。



子どもたちと話しながら、ボランティアスタッフが食事の準備をしている。Kiitosには現在60人を超えるボランティアが様々な形、頻度でかかわっている。



午後6時過ぎからは、みんなで食卓を囲んで夕食の時間。いっしょに食べる相手がいること、自分のために食事を作ってくれることは、子どもたちに大きな安心感をもたらす。



毎週土曜日には体育館やグラウンドを借り、希望者でスポーツをしている。この日はキックベースボールや鬼ごっこをして汗を流した。

連載インタビュー ドン・ボスコの 教え子たち

今、様々な分野で活躍している
サレジオン同窓生を紹介します。

●取材・文／編集部



ノンフィクション・ライター

いいじま ゆうこ

ノンフィクション・ライター。一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。専門紙記者を経てフリーに。『ビッグイシュー』『婦人公論』等で取材、執筆を行うほか、大学で非常勤講師を務める。著書に『ルポ貧困女子』（岩波新書）、『ルポ若者ホームレス』（ちくま新書）等。

We are DBV's Students

労働・貧困問題を追いかけて続けた記者がいる。彼女は今まで数多くの現場に足を踏み入れて、問題の当事者たちに直接インタビューを行ってきた。現在は大学で教鞭をとる傍ら、単行本やホームレスの自立を支援する雑誌等で取材・執筆を行うノンフィクション・ライター、飯島裕子さんに話を聞いた。

サレジオにかかわるきっかけは？

母がサレジオ会系の学校に通っていたことが、最初の繋がりだと思ひます。母は学生時代に洗礼を受け、私も赤ん坊のとき、サレジオ会のA.クレバコーレ神父から洗礼を受けました。ヴァンチェンツォ・チマッティ神父（最初に来日したサレジオ会宣教師）にあやかり、洗礼名はヴァンチェンティーナなんですよ。

子どもの頃から家族で下井草教会に通っていました。私が子どもの頃は信者の子どもだけを集めた土曜学校というものがあったので、週末は多くの時間を教会で遊びながら過ごすという感じでした。

でも中学に入ったところから思春期ならではの“反発”が頭をもたげてきます。「私はプロテスタントにも仏教徒にもなる可能性があったのに、どうして勝手にカトリックにされちゃったんだ！」って。だけど結局、友達に会いたいから日曜日は教会に行ってしまう（笑）。そんなとき、出会ったのが、当時一時的に下井草教会に滞在していた溝部脩神父（当時）でした。あれよあれよと高校生会の活動に巻き込まれ、誘われるまま発足間もないDBVG（ドン・ボスコ海外青年ボランティアグループ）に参加し、フィリピンにまで行ってしまった——心のわだかまりもいつの間にか消えていました。

DBVG参加後、どのような変化がありましたか？

DBVGでは、大学1年と3年のときにフィリピンへ行きました。でも“ボランティア”として行ったはずなのに何もできなかった……。たとえば「カーテンを縫ってほしい」と頼まれても足踏みミシンしかなくてうまくできなかったり、貧しい養護施設に滞在したときは喜ばれたけれど、ほんの数週間で何の意味があるんだろうと悩んだり。

でもフィリピンの人たちは心から歓迎してくれて、私は彼らのことが大好きになりました。現地でたびたび「日本で働きたい」と言われたことも印象的でした。当時、日本にはビザを持たない人も含め、多くのフィリピン人が出稼ぎに来ていたんです。DBVGの熱気冷めやらぬ私は帰国後、フィリピンの人たちが多く集まる教会などに出かけて行くようになりました。そこで出会った女性たちにインタビューをして卒論を書いたのですが、その経験が今の仕事に繋がっているのかもしれない。

最初に会ったのはエンターテイナービザで日本に来ていた若い女性でした。彼女と待ち合わせたところ、強面の男性と一緒に現れたんです。いわゆるヤクザがブローカーとして彼女たちの来日を斡旋していた時代。喫茶店に入るなり「ビールくれ」と言われ、私は縮み上がってしまいました。後にも先にもあんなに緊張した取材はありません。その男性、実はとてもいい人で「お姉ちゃん、しっかり頑張んなよ」ってご馳走してくれたんですけどね（笑）。



1994年、第4回DBVG（フィリピン派遣）での様子。この他、ソロモン諸島、東ティモールへも若者を派遣していた。

今の仕事にいたるまでの経緯は？

大学卒業後は特殊法人を経て、キリスト新聞という小さな新聞社の記者になりました。カトリック以外のキリスト教を知りたいという思いもあり、エキュメニズム*を謳う同社に入りました。小さな会社でしから、取材、執筆から撮影、校正まで一通りの技術を学ぶことができたのは良かったですね。そこで5年半ほど過ごした後、フリーランスになり、さまざまな媒体で書いています。

創刊間もない頃から記事を書いている雑誌に「ビッグイシュー日本版」があります。ビッグイシューはロンドンでホームレス支援のために創刊された雑誌です。日本でも駅などでホームレスの人が売っているのをご覧になったことがあるかもしれません。「ビッグイシュー日本版」では主に巻頭のリレーインタビューを担当してい



飯島さんが取材・執筆している雑誌『ビッグイシュー日本版』。ホームレス状態にある人が路上で販売することによって収入を得、自立を目指している。ビッグイシュー日本サイト www.bigissue.jp

ます。著名人の方に分岐点となった出来事についてうかがうもので、10年以上続いており、話を聞いた人の数はのべ250人以上に上るんですよ。

ビッグイシューとの出会いをとおして、ホームレスの人たちと関わる機会が増え、貧困を身近に感じるようになりました。DBVGでフィリピンに行ったときも貧困を目の当たりにし、衝撃を受けました。しかしそれはあくまでも“遠くで燃えている火”だった。しかし今、私たちにあって貧困は決して遠い話ではありません。私自身、就職氷河期世代で就職活動には苦労しましたし、その後もフリーランスという不安定な立場で仕事をしてきました。そんな状況の中、貧困問題について深く考えるようになっていったんです。

本を出版された経緯は？

これまで2冊の本を出しています。1冊目が『ルポ若者ホームレス』（2011年、ちくま新書）、もう1冊が昨年の秋に出版した『ルポ貧困女子』（岩波新書）。いずれも若者と貧困がテーマです。

『ルポ若者ホームレス』は、若年男性ホームレス50人へのインタビューをもとに書きました。リーマンショック前後からビッグイシューの販売者に若者が増え始めたのですが、販売が長続きしない、会話をしたまらないなど、支援者側もどう接したらいいかわからない状況がありました。それなら直接話を聞いてみようと思ったのがこのインタビューです。インタビューでは様々なことが明らかになりました。たとえば彼らの大半は、家族との関係が切れてしまっていること、仕事経験はあるものの派遣や契約を転々としてきたことなどです。

*エキュメニズム：キリスト教の教派を超えた結束を目指す主義。

『ルポ貧困女子』

は、若年女性が置かれている状況について50人近く取材したものです。若者の雇用の非正規化や貧困化は人びとの知るところになっていますが、問題にされるのは若年男性ばかり。実際には若年女性も厳しいのですが、その状況は構造上、非常に見えづらくなっています。そんな女性たちのことを書いたルポルタージュです。ぜひ多くの皆さんに手にとって読んでいただきたいと思います。



『ルポ 若者ホームレス』（左）と『ルポ 貧困女子』（右）。飯島さんが貧困を抱えた人びとに聞き取り調査をし、まとめた新書だ。

後輩たちへのメッセージは？

昔っからはねっ返りで、通っていたミッションスクールではシスターに追いかけていました（笑）。コソコソやるのが苦手な勉強もできなかった。でも唯一好きだったのは、人に会うことと、文章を書くことでした。

どんなことでも自分の好きなことを見つけることは、人生の宝になると思ひます。逆に“先生の目から見たい子”で過ごしてしまうと、自分が本当にやりたいことがわからなくなる場合もあるんじゃないかな。

最後にもう一つ。貧困なんて自分のまわりにはないし、関係ないと思っている人もい



るかもしれません。でもこれから格差はどんどん拡大し、社会や人びとが分断されていく可能性もあります。そんな状況を救うのは、他者の痛みを自分の痛みとして感じる力。どんなときもそこにいない人のことを考えられる想像力をもってほしいと思ひます。

私は相変わらずはねっ返りですが、それが問題意識の素になっていると今では開き直っています（笑）。これからも書くことを通じて、人びとの見えない痛みを伝えていくことができればと願っています。



DBVG
ドン・ボスコ海外青年
ボランティアグループ（事務局）
東京都新宿区若葉 1-22-12
<http://www.donboscojp.org/sdbdbvg/>



サレジオ家族が関わりをもつ
世界そして日本の風景を紹介します。

2016年10月、サレジオ同窓会連合アジア・オセア
ニア地域大会の開会ミサのため、ドン・ボスコ・コモ
ロ扶助者聖マリア教会に向かう参加者たち。
大きく鮮やかなブーゲンビリアの木が、南国の日差し
から守りつつ聖堂へと招いてくれる。



Dili Democratic Republic of Timor-Leste

デイリ／東ティモール民主共和国
公用語: テトゥン語、ポルトガル語

東ティモールは2002年に独立した太平洋の島国。独立まで約30年の間に隣国
インドネシア軍によって数十万人が殺害された。サレジオ会は70年以上前から
宣教師を派遣し、教会・学校・福祉事業を展開、ティモールの人びとと共に困難
な道を歩んできた。「ドン・ボスコのおかげで、つらく悲しい歴史を乗り越えて
“人間” になれました」と同窓生は感謝と誇りを胸に語る。サレジオ高専（東京
都町田市）は20年以上、学生ボランティアを派遣。日本との絆が育まれている。



ランド・ミットリ さん
Rand Mittri
中東管区
シリア・アレッポ
Aleppo, Syria



WYD世界青年の日大会で体験を語るランド・ミットリさん。教皇フランシスコと若者たちが耳を傾ける。

皆さんに感謝します 愛する祖国シリアのために祈ってください

2016年7月、ポーランドのクラクフで、世界中から50万人の青年が教皇フランシスコを囲んで集まり、第31回WYD世界青年の日大会（World Youth Day）が開催された。30日に行われた祈りの集いの時、激しい内戦が続くシリア・アレッポのサレジオ会オラトリオ（教会の青少年センター）のリーダー、ランド・ミットリさんは、戦禍の中でも誰も希望を奪うことはできないと語った。

「こんにちは。私の名前はランド・ミットリです。26歳です。私はシリアの自然科学大学を卒業し、現在、アレッポ大学の修士課程で勉強中です。アレッポのサレジオ会ドン・ボスコセンターのメンバーです。ご存じのように、私たちの町は破壊され、荒れ果て、打ち砕かれました。私たちの人生の意味は無に帰してしまいました。」

私は21人の仲間と共に、中東のサレジオの若者を代表し、シリア、レバノン、エジプトから皆さんに会いにやってきました。私たちの心の痛みは、あまりに大きく、言葉に表せませんが、私たちの生きている現

実のいくつかの側面を皆さんにお話しします。

私たちは毎日、死に取り囲まれて生きています。でも皆さんと同じように、毎朝、職場や学校に行くため家を後にします。その瞬間、恐れに捕らえられます。帰って来たとき、今、後にしたのと同じ姿で家や家族を見ることができないかもしれない。その日、自分が死ぬかもしれません。または家族が、死や殺戮に取り囲まれ、逃げ道がない、助けてくれる人は誰もいないというのは、とても苦しく辛いものです。

神様、あなたはどこにおられるのですか？ 私たちを見捨てられたのですか？ あなたは存在するの？



シリア・アレッポで同時開催されたWYD大会で、歓声に沸く1200人の若者たち。アレッポのピエル・ジャブロン神父は、「アレッポでは善意の人びとを通していつくしみの神を見ます。いつくしみとゆるしがなければ、この戦争は決して終わりません」と語る。



WYDにあわせクラクフで開催されたSYMサレジオ青年運動フォーラムには、世界55か国6千人の若者が参加。フェルナンデス総長（サレジオ会）とランゴア総長（サレジオ・シスターズ）は、共感といつくしみを持って生きることを若者たちに呼びかけた。

Salesian People

「私たちが憐れんでくださらないのですか？ あなたは愛の神ではないのですか？ 毎日、数分間、このように問いかけます。私には答えがありません。」

これが最後ということもある？ 苦しみながら死ぬために私たちは生まれて来たの？ それとも、生きるために、満ち満ちたいのちを生きるために私たちは生まれてきたのでしょうか？ 私の戦争体験は厳しく、辛いものです。しかし、この体験によって、私は早く成熟し、大人になり、物事を別の視点から見られるようになりました。

私はアレッポのドン・ボスコセンターで奉仕しています。このセンターは700人以上の若者を受け入れています。若者たちは、微笑みと励ましの言葉を求めてやって来ます。生活の中に欠けているもの、真に人間らしい触れ合いを求めています。しかし、私自身、そういったものが底をついているのに、喜びと信仰を人に差し出すのはとても難しいことです。

この戦争で、センターでも多くの友を失いました。13歳の男の子ジャックは、カテキズムに参加し友達と遊ぶためにバスを待っていたとき、死にました。ある夕方、アンワルとミシェルは私たちと別れ、次の日もセンターで会えると私たちは思っていました。でも残念なことに、その夜の眠りは、二人にとって永遠のものとなりました。家が破壊され、二人はその下敷きになり、天国の天使たちの仲間入りをしたのです。死んだ人びとの中には、私の友人、ヌールやアントワヌ、ウィリアム、そのほか多くの若者がいます。彼らはただ、人間を信じる勇気を持っただけなのです。彼らは皆、この血なまぐさい戦争の殉教者です。意味のない不条理な戦争、私たちの魂、夢、希望を破壊したこの戦争の。人のいのちの破壊は、レンガや石の破壊に比べて、無

限に大きな損失なのです。

このあらゆる苦しみにもかかわらず、教会での私の生活、友人たちの生活は、私たちの町の子どもや若者に奉仕し、人のために自分を分かち合う喜びに満ちています。私たちはドン・ボスコの足跡をたどっています。ドン・ボスコは、苦しみがつらくなった時にも、喜びを2倍に増やした人です。私たちは、水汲みを手伝ってくれる子どもの中に、危険にさらされた人を救出しようと働く人びとの中に、子どもたちに食べるものを持って帰るまであきらめない親たちの中に、神を見ます。

私は乏しい人生経験をとおして、キリストへの信仰が人生の置かれた状況を超えるということを学びました。あらゆる苦しみにもかかわらず、神は存在すると、私はますます信じています。時に私たちの苦しみをとおして、愛の本当の意味を神は教えてくださると私は思います。キリストへの信仰は、私の喜び、希望の理由です。このまことの喜びを、誰も私から奪うことはできないでしょう。

私は神に願います。傷つき、悲しみ、見捨てられたすべての人の心に、いつくしみをもって触れ、喜びを蒔く恵みを、私に、シリアに暮らすすべての人に、そして世界中の人びとにお与えください。皆さんに感謝します。そして心からお願いします。私の愛する祖国シリアのために祈ってください。

News source

「ANS」2016年8月2日付記事より

「ANS」は世界のサレジオ家族ニュースサイト。毎日世界各地のサレジオ関連ニュースが英語・イタリア語など6か国語で紹介されています。http://infoans.org





スペイン

貧しい若者のために
自転車を

News Source: ANS



自転車を整備するエルチェの生徒たち

スペイン・エルチェのサレジオ会は、貧しい子どもたちに自転車を贈ることをとおして、人と人が互いに協力し合う連帯を生み出している。エルチェのサレジオ中学・高等学校で車両保守の基礎を教えているペドロ・モレノさんは、貧しい子どもや若者が、実用的でよく整備された自転車を手に入れられるようにする、このプロジェクトのコーディネーター。始まって5年目、プロジェクトは「自転車で連帯5.0」と名付けられた。

ベトナム

神の僕マチェン神父
人びとの心を動かす

News Source: ANS



列福運動中のアンジェイ・マチェン神父

「ベトナムのドン・ボスコ」と呼ばれた神の僕アンジェイ・マチェン神父(1904～1999年)は、中国、ベトナム、スロベニアでよく知られている。列福調査が進む中、マチェン神父の生き方に触発された取り組みが生まれている。

最初に取り組むのは、中古の壊れた自転車を集めるため、キャンペーンを立ち上げること。ポスターやソーシャル・ネットワークをとおり、学校で、また一般社会に向けて宣伝を行う。

「自転車を集める生徒たちは、修理も行います。傷みさび付いた部分を磨き、塗装をし、チェーンに油をさし、破損した部品を修理・交換する、機械的また審美的な、全体的修理を行う作業です。作業は学校の実習室で行われ、さまざまな学習モジュールのカリキュラムの一環になっています」とモレノさんは語る。

その後、必要とする人びとに生徒たち自身が自転車を届ける。そのほとんどは子どもや若者。「この数年にわたり、160台以上の自転車をAldeas Infantiles (子どもの村) や赤十字といった団体、教会付属のカリタス、避難所、青少年を保護する寮、養護施設などに届けてきました。加えて、数多くの困窮する子どもや若者にも届けました。この活動によって生徒たちは連帯を学ぶだけでなく、自分たちの職業訓練にもなっているのです。」

マチェン神父の教え子の一人、サレジオ同窓生のフランシス・グエンさんは、サレジオ会と協力し、ホーチミン空港近くに、農村出身の若者のための職業訓練センター「Bisto Mai-Sen」を設立。120人ほどの男女の青年が、製パン、料理、ホテル・レストラン業を学んでいる。

アンジェイ・マチェン神父は中国、そしてベトナム(1935～1979年)で宣教師として働き、スロベニアに帰った後は、生涯最後の日々まで聴罪司祭として働いた。宣教に44年、スロベニアで宣教促進の働きに20年をささげた。マチェン神父の日記(手書きで6千ページ以上)に収録された内省や黙想は、豊かで深い信仰生活と霊的成長へのたゆみない努力を語る。

スロベニアとベトナムのサレジオ会両管区はマチェン神父の列福運動を推進中。2016年11月にはベトナムで集められた証言が列福調査の資料の一環として正式に受理され、数か月のうちに、歴史調査も終えられと期待される。列福・列聖申請人カメローニ神父は、サレジオ家族の皆に、この神の僕を知り、取り次ぎを祈ってほしいと呼びかけている。

東ティモール

子どもの家の
再建のために

News Source: ANS



「ドン・ボスコ子どもの家」の子どもたち

東ティモールは、長きにわたり、紛争、政変、暴動などに苦しんできた。

ロスパロスにある「ドン・ボスコ子どもの家」の事業は、1975年から1999年にかけてインドネシアに

よる占領と闘い亡くなった人びとの孤児を受け入れるため、始まった。インドネシアからの独立後、サレジオ会宣教師たちは、東ティモール各地からの何百人もの孤児や貧しい子どもたちを受け入れ始めた。

その後、メンテナンスにかかる資金の不足などのため、施設の劣化が深刻になっている。「天井、窓、ドア、水道管、エネルギー・システムなど、すべてが劣悪な状態です。」問題が多く、住み続けることができないほどである。

子どもの家は通常、100人ほどの子どもたちを受け入れているが、子どもたちが安全に、健康的な環境で生活するために、現在、緊急に修復が必要となっている。勉強に集中し、将来、東ティモールのそれぞれの村や地域で、社会の発展に貢献する人となることを願っている。

ハイチ

80万人に
緊急食糧支援が必要

News Source: ANS



ハイチの被災地の状況

2016年10月にハリケーン・マシューがハイチ西部に壊滅的被害をもたらし、豪雨による川の氾濫、洪水が追い打ちをかけた。さらに、ハイチ都市部の住人の半数以上が過密状態のスラムに暮らし、地震、ハリケーン、疫病に対して無防備な状況。FAO(国連食糧農業機関)によって行われた査定では、農作物、家畜、漁業に「深刻な被害」があり、

インド

無料診療と献血

News Source: ANS



2016年8月12～13日、インド・アッサム州トゥラのサレジオ高校は、社会への責任と貧しい人への奉仕の意識を高める取り組みとして、無料の眼科検診を提供し、献血を呼びかけた。400人以上の人が献血に応じ、サレジオ同窓生を中心とする医療チームは200人以上の検診を行い、必要とする人に無料の白内障手術を約束した。



DBK[ドン・ボスコ基金]は、
特に助けが必要な青少年の保護育成を支援する、
サレジオの基金です。

サレジオ会の創立者ドン・ボスコの精神を受け継ぎ、貧困・家庭問題・災害等により、特に助けを必要とする青少年を保護育成する国内外のプロジェクトを支援しています。

DBKウェブサイト

<http://salesians.jp/about/dbk>

機関誌「DBKだより」バックナンバーも
ご覧いただけます。



DBK [ドン・ボスコ基金] では、ボリビア、アンゴラ、ソロモン諸島、日本国内など、世界各国のサレジオ関係グループによる青少年の保護育成プロジェクト等を支援しています。
ご寄付くださる方は、下記の振込口座まで (または本誌とじ込みの払込用紙にて) お振り込みください。

郵便振替口座番号: 00190-5-292253

加入者名: ドン・ボスコ基金

※通信欄の寄付意向にチェックを入れて、寄付金額をご明記ください。寄付者氏名の非公表をご希望の方は、払込用紙に「匿名希望」(☑チェックマーク) をご記入ください。

ネパール

学校の再建と
将来への計画

News Source: Bosco Link



ネパール地震で被災した学校の校舎

2015年4月、ネパールは1934年以來最悪の地震の被害に見舞われた。8000人以上が犠牲になり、甚大な物的被害があった。ネパールの人口は2700万人、貧困率は24.8%、人口の57%が字を読めない。

サレジオのNGO “Don Bosco Network” はネパールの将来に力を与えるインフラとして、学校の再建を助ける努力を続けている。

国の広範囲に壊滅的被害をもたらした地震発生から1年以上を経てなお、Don Bosco Network は人びとへの支援を続けている。「今も、小さな孤立した集落に多くの家族が暮らしていて、サレジオ会は食糧、水の浄化装置、雨露をしのぐための屋根用資材、耐水の布地などを配り、支援しています。」

ネパール政府との交渉を経て、また再建のために必要な計画を申請した後、サレジオ会は、地震の被害が最も大きかった地域、ラメチャブ、ドラッカ、シンデゥパルチョウク、ラリッブルなどで12の公立学校の再建を始めることになる。サレジオ会員たちは、これらのより孤立した地域で子どもや若者たちが安全な建物で学べるように、雨期が終わりしだい、間を置かずに再建に取りかかるよう、建物の状態を調査し、資材の調達や機材の準備を始めるため、これらの地域に赴いている。

モンゴルからの手紙

青少年の育成のために

サレジオン・シスターズ宣教女
シスター小島華子

シスター小島とモンゴルの子どもたち。サマーキャンプで。

「私たちの修道院は首都ウランバートルと、そこから北へ4時間の所にあるダルハンの2か所にあり、ウランバートルでは幼稚園と小学校を運営しています。ダルハンではサレジオ会の神父様方と教会活動をしています。

2007年にサレジオン・シスターズの最初の宣教女がモンゴルに参りましたが、政府の扱いが厳しく、宣教は困難です。

南スーダンからの手紙

深刻な食糧不足

イエスのカリタス修道会宣教女
シスター下崎優子

シスター下崎とグンボの子どもたち

「2016年7月、5回目の独立記念日に前政府の分裂が起こり、今も不安定な情勢が続いています。7月末から8月末まで、主任神父の強い勧めで私たちも国外退避し、ウガンダ国境の最大避難キャンプ近くの修道会でお世話になりました。ここにたどり着くまで、ウガンダ国内を転々とし、国外避難の大変さを体験しました。私たちは修道会を頼りましたが、南スーダンの難民は、行くあてもなくさ迷い、やっと難民キャンプにたどり着いても、力尽きて亡くなる人も多いと

学校では宗教用品を置いてはいけないので直接宣教活動はできませんが、私たち宣教女の存在をもって、また教会では様々な行事をとおして神様から一人ひとりが愛されていることを実感できるように努力しています。

行事をするとき私たちの夢は大きく膨らみますが、いつもお金の問題に直面します。でも、お金がないからと青少年への善と愛を削ることはできません。神様に委ねて夢の実現に努めています。

毎日オラトリオをしており、遊びに来る子どもたちがたくさんいます。しかし、宗教を嫌う人びとが多く、以前、子どもを迎えに来た母親が、怒った顔で『ほかに遊ぶ場所はないの!』と言うのを聞きました。子どもたちは私たちが大好きですが、親が認めません。

皆様からの応援で私たちの宣教を支えてください。神様からの祝福を祈りつつ……」

聞きます。私たちは、難民キャンプを何度か訪問し、その現状を目の当たりにしました。

私たちのグンボの教会の敷地内には2013年と今回の内戦で逃れて来た国内難民が4000人ほどいます。グンボ村には親戚を頼って一緒に住んでいる人も合わせると、もっと多くの難民がいます。

今、最大の問題は食糧の不足です。教会敷地内の難民は国連からの食糧配布を受けることができませんが、1か月に一度の配布でその量は1日に一度だけの食事の分です。村人たちは親戚が増えたにもかかわらず、食糧配布を受けることができません。現金収入の少ない国民は、食糧不足で亡くなり、家族を養うことができず、自殺する父親もいます。

12月から乾季が始まり、10か月間は砂漠状態になって自然からの食べ物もなくなってしまいます。どうか、食糧支援のために寄付をお願いいたします。何の恩返しもできませんが、南スーダンの皆さんと共に感謝の祈りを捧げさせていただきます。」



日本で唯一の 工業系ミッションスクール



1. 様々なプロジェクト活動に意欲的に挑戦する学生たち。2. ソーラーカーレースにて調整を行う学生たちの真剣な姿。3. プロダクトデザインを学ぶデザイン学科の学生たち。4. 電気工学科1年で取り組む電動カートの製作。5. 機械電子工学科3年で取り組む自立走行ロボット^{*1}の製作。6. 情報工学科の授業風景。7. 高専パソコン^{*1}に向け準備をする学生たち。毎年競技部門や自由部門に挑戦している。8. 高専デザコン^{*2}に向け準備をする学生たち。第2回大会から出場し優秀な成績を収めている。9. 高専ロボコン^{*3}の様子。近年は全校プロジェクトとして全学科から協力者を集い推進している。

*1 高専パソコン…「全国高等専門学校プログラミングコンテスト」の通称。
*2 高専デザコン…「全国高等専門学校デザインコンペティション」の通称。
*3 高専ロボコン…「アイデア対決・全国高等専門学校ロボットコンテスト」の通称。

V i s i t t h e S a l e s i a n F a m i l y

・サレジオ工業高等専門学校 東京都町田市小山ヶ丘

○善き技術者を育てて80年

サレジオ工業高等専門学校（サレジオ高専）は、1935年に東京・杉並の地で帝都育英工芸学校として教育活動をスタートしました。当時は印刷科と裁縫科の2学科からなっていました。1960年に育英工業高等学校、そして1967年に育英工業高等専門学校となり、2005年に町田市多摩境へ移転して、校名をサレジオ工業高等専門学校に変更し、現在に至っています。本校は80年の間、多くの技術者を育て、日本社会に送り出してきました。

サレジオ高専は日本で唯一の工業系のミッションスクールです。本校はドン・ボスコがオラトリオでの教育活動の理念とした「良き社会人の育成」を継承し、「キリスト教精神に基づく人間観をもった善き職業人を養成す

る」ことを教育理念として謳っています。

○高専の強みは「進路決定率」

高専は、国立・公立・私立を合わせると日本には57校あります。高専は15歳から20歳までの若者が学ぶ5年制の学校です。高専の特徴は出口に強いことです。それは就職・大学編入また専攻科進学を合わせて進路決定率がほぼ10割であるということです。サレジオ高専も進路決定率が毎年9割を超えています。高専生が企業や大学から人気があるのは5年間、じっくりと専門を学んだためです。良く準備された若者たちなので、企業も大学も彼らに期待するものがあるのでしょう。とはいえ3年生までは高校の学習課程を修了することが必須ですから、座学と実験・実習のために使

う時間は多く、1年生でも8時間授業の日が週に3日あります。大変な思いをすることも学生たちの成長を促しています。

○特色ある4つの専門学科とキリスト教教育

サレジオ高専には4つの学科と専攻科があります。専攻科は本科5年を終えたとさらに2年間、サレジオ高専で研究を続ける教育システムです。年齢は大学3・4年生に当たりますので、専攻科修了時には学士号（工学）を手にするようになります。本科は、デザイン学科・電気工学科・機械電子工学科・情報工学科の4つです。デザイン学科では、プロダクト&インテリアデザイン（空間プラン/家具/自動車/家電製品/情報機器などの立体的デザイン分野）、

ビジュアルコミュニケーションデザイン（広告/雑誌/ポスター/カタログなどの平面的デザイン分野）を教育の柱としています。電気工学科は発電や送電、大きな電気の力をそれぞれの使用に合わせて変換する技術や自然エネルギー、太陽や風の力をエネルギーにすることなどを学んでいます。機械電子工学科は、ロボットの仕組みやクッキングヒーターやスピーカーなど身近な家電の仕組み、また携帯電話やGPSといった情報通信の仕組みについて学ぶ学科です。最後に情報工学科は情報ネットワークの仕組みやプログラミングの言語、プログラム開発をととしてソフトウェアについて学ぶ学科です。

本校は男女共学です。工業系ということもあって男女の比率は圧倒的に男子が多いのですが、デザイン学科は比較的女子

の多い学科です。

本校の宗教的な取り組みですが、1・2年生にはメディテーションアワー、ドン・ボスコの講話と、全学年向けには希望者のみチャプレンによる月例ミサがあります。また毎週火曜日と金曜日の朝、全教職員が交代で担当して学生へメッセージを送るモーニング・トークがあります。本校の教職員の願いはサレジオ高専で学んだこと、身につけた技術を他人のために役立てる心をもった大人に学生が成長することです。

○一人ひとりが生き生きと

サレジオ高専の学生を一語で表現すると「快活」でしょう。生き生きと楽しく学校生活を送っている様子を目にします。人間ですからときどき、他人に迷惑のかかるよ

うな失敗をして教員から厳しく注意、指導を受けることもあります。それでも学校生活は楽しいようです。神さまに守られて、若者たちが安心して生き生きと活動するというドン・ボスコの学校の伝統がサレジオ高専に継承されています。

（文・写真／サレジオ工業高等専門学校提供）



サレジオ工業高等専門学校
東京都町田市小山ヶ丘4-6-8
<http://www.salesio-sp.ac.jp>

祈りながら歩く、
歩きながら祈る

小瀬良教会へ向かう青年たち。曲がりくねった道の先に海が見える。

SYM青年 上五島巡礼

祈りの島
「五島」とは？

赤文字：巡礼の訪問地



九州の最西端、長崎県に属する「五島列島」。中通島を中心とする北東部を「上五島」、福江島を中心とする南西部を「下五島」と呼ぶ。1566年イエズス会宣教師が五島に渡来。直後に禁教令が布かれ、キリスト教は一度衰退するが、1797年外海から五島へ渡った108名の潜伏キリシタンによって、秘密裏に信仰が復活する。1868年に「五島崩れ」と呼ばれる激烈な迫害を受けながらも、信仰は辛抱強く守られ、1873年に禁教が解かれると五島全土に次々と聖堂が建てられた。それらは人口の10%以上を占めるカトリック信徒によって守られ、今も51の教会が島の僻地に佇んでいる。



毎日くたくたになって帰ってきても、分かち合いと祈りの時間だけはしっかり設けて、その日いちにちの恵みに感謝し、それぞれの思いを分かち合った。

巡礼中は多くの場面で、共に歩いた仲間やスタッフをとおしてイエスさまとつながっていることを感じる事ができた。普段も1日の中で1回でもイエスさまとつながる感覚をもてたら、充実のレベルは大きく変わと思う。(19歳・男性・野尻湖聖書学校OB)

「祈る」ってどういうこと？誰のために、何のために、どんなふうに祈ればいいのかとずっと思っていた。皆の真似をしながら一緒にミサに与ったり、祈ったりしているうちに、少しずつその意味をわかってきたように思う。

(27歳・女性・目黒星美学園教員)



教会ばかりでなく、旧出津教助院とド・ロ神父記念館にも訪れ、外海に伝わるカトリックの歴史を学んだ。

SYMとして夏、若者のために何が出来るかを考え企画した「SYM青年上五島巡礼」が2016年8月25～29日に行われた。東京・埼玉・神奈川・山梨・京都・大阪・奈良から17人の青年と、サレジオ家族の神父・シスター5人が集い、「祈りながら歩く、歩きながら祈る」のテーマのもと、日本のカトリック信仰の原点である長崎の五島と外海を訪れ、青方・跡次・真手ノ浦・中ノ浦・大浦・桐・浜串・高井旅・福江・青砂ヶ浦・曾根・大水・小瀬良・江袋・赤波江・仲知・米山・頭ヶ島・鯛ノ浦・出津・黒崎・神ノ島・馬込の23の教会を巡った。

●文・写真／SYM JAPAN事務局

上五島に着いて1日目は24.5km、2日目は22.8km、3日目は雨の中を15km、それも決して平坦ではない道を歩いたこのハードな巡礼は、とにかく早起きだった。2日目に至っては4時起き！皆寝ぼけ眼で寝袋をたたんだ。真夏の日差しに照らされる前に距離を稼ぐためである。しかし道中イノシシに遭遇するほどの大自然は、時に暑さも辛さも忘れさせた。特にどこまでも碧く透きとおる海のきれいさと言ったら、これ以上のものはなかった。

初対面の参加者が多く初めは緊張が見られたが、共に歩くうちに打ち解け、あっという間に心をゆるす仲間となった。皆で歩きながら語り合い、歌をうたい、ロザリオを唱え、時に一人黙想し、教会を訪れてはまた共に祈った。訪れた先で地元の神父様や信徒の方から話を聞き、共にミサに与ることもでき、五島に根づく確かな信仰を肌で感じた。

そんな巡礼は、サレジオ家族と、長崎教区の神父様方をはじめお告げのマリア会のシスター方や信徒の方々の絶大な協力の上に実現した。この場を借りて大きな感謝を伝えたい。本当にありがとうございました！



大水教会に到着すると信徒の方々が「ふくれまんじゅう」とお茶を用意して出迎えてくださった。皆さん苗字が「大水」なのだそうです。

日曜は早起きが辛かったり、バイトや用事を入れたりして教会に行けていない。行っても友達に会うために、本来の目的を忘れている。でも五島で、信徒として本来あるべき姿を見た気がして、自分ももっと強い信仰をもってミサに与りたいと思った。

(19歳・女性・下井草教会)



雷さえ鳴る雨の中を歩き続け、やっとの思いで迎っていた頭ヶ島教会での一枚。気づけば雨は上がっていた。

大水教会へ向かう恐ろしい坂道。急な勾配も物ともせず、元気に歌をうたいながら進んだ。



被災地訪問

熊本



「危険」の札が貼られ、立ち入ることのできない家。

熊本地震から4か月ほど経った昨夏、2016年8月22～25日の3泊4日で、関東圏のサレジオ青年有志が浦田慎二郎神父同伴のもと被災地を訪れた。これはSYMの特徴である「他の人たち、とくに助けを必要としている人たちのために何かをする」という観点から、被災者と交わり、共に祈ることを目的に企画された。知り合い俤に被災されたカトリック園を訪ねて子どもたちと触れ合い、信徒の方々から話を伺った。

●文・写真／SYM JAPAN事務局

熊本地震の被害が最も大きかったとされる益城町に車で差しかったとき、まず目に飛び込んできたのは、町を埋め尽くすほどのブルーシートだった。見たところ町には瓦屋根の家屋が多く、地震で瓦が剥がれ落ちたところをブルーシートで覆っていたのだった。町の中は崩壊した家々、瓦礫の山が、地震直後のニュースで見た、あのまま。目を凝らすとその中にぼつり、ぼつりと、瓦礫を片付ける人の寂しげな背中が見えた。

被災された信徒の方は、震災当時とその後の生活について話しながら、ときどき声を詰まらせ、堪えきれず涙を流していた。春の地震から4か月、町も、人の心も癒えてはいない現状を目の当たりにした。被災者がとにかく訴えていたのは、人手が足りないこと。熊本が未だこのような現状であることを皆に知ってほしい、忘れないでほしいということだった。今もなお地震の爪痕に苦しむ人びとに心を向け、私たちにできることを探し、確実に実行していきたい。

もし自分の家がこんなふう倒壊してしまったらと考えたらすぐショックで……。でも実際にそれを経験して、その中でずっと暮らしている人がいるんだと思ったら、言いようもない苦しさを感じた。

(19歳・女性・碑文谷教会)

近頃はメディアで熊本のことを全然見かけないので、復興は順調に進んでいるのだと思っていた。とても申し訳ない。遠くいても義援金や支援物資など、他にも様々な形で復興のお手伝いができるはず。

(22歳・女性・サレジオ高専OG)



熊本県内のマリア幼稚園・聖母幼稚園・聖母幼愛園を訪れて、子どもたちと遊んだ。



被災された信徒の方のお宅でミサを捧げ、特に熊本地震で被災された方々のために共に祈った。

被災者の声.1

避難所では、自衛隊の炊き出しで食料を確保していました。朝はおにぎり2個(そのうちにおにぎり1個とパン1個)、昼はパン、夜はお弁当。種類も限られる。でもそれをもらうのに毎回1時間半ほど並んで……腰が痛くなったり、もうめんどくさく食べなかったりもしました。

でもいつも「皆ががんばろうね、神さまがきっと良くしてくださるからね」と子どもを励まししながら自分にも言い聞かせていたので、それほど不安はなかったんです。支援物資も届いていたし、施設の職員さんも熱心に世話をしてくれました。「神さま助けて。神さまお願い!!」って強く思ったらすぐその通りになるような、そんな体験もたくさんあって……、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。(40代・女性)

被災者の声.2

「お祈りします」と言ってくれる、その言葉がありがたいです。皆が少しでも前向きに歩いていけるように、心を整えていけるようにお祈りください。

もし東京で震度7の地震が続けて2回も起こったら、日本は経済的に、他にもいろんな意味で止まってしまうでしょう。本当に大変なことです。どんなに備えていても、「想定外」という言葉が飛び交うと思います。

ですから、皆さんには、今回熊本で起こったことは、今日、明日、自分の住む場所で起こってもおかしくないという気持ちで毎日を大事に生きてほしいです。それでこそ、皆さんがこうして熊本を訪れてくださった意味があると思います。頑張ってください。(健軍教会・浦川務神父)

ジュビレオ青年徒歩巡礼 in

浜松

2016年9月17～18日、いつくしみの特別聖年の巡礼指定教会であったカトリック浜松教会(静岡)にて「ジュビレオ青年徒歩巡礼」が行われた。東京から11人、大阪から1人の青年と、浜松教会から34人の子どもたち、四日市サレジオ志願院から10人の志願生が参加し、計50人を超える大きな巡礼団となった。巡礼はまず聖年について学んで心を整え、教会を目指して歩く中で仲間へいつくしみを示し、聖年の扉をくぐるというプランで進められた。 ●文・写真／SYM JAPAN事務局

1日目、夕食を共にし、志願生が準備してくれたレクを楽しんだ後、特別聖年のシンボルマークに込められた意味や聖年の扉をくぐるこの意味を教わった。そして聖体礼拝とゆるしの秘跡の時間。未信徒の青年も少なくなかったため、彼らも特別にゆるしの秘跡にならって自分の悪かった行いを告白し、祝福をいただいた。

翌日は残念ながら雨で、中間地点までは車移動。雨宿りの間、3人の青年が「イエスを信じるとはどういうことか?」をテーマに話し、そのうちに雨も弱まって徒歩巡礼を再開! いつくしみの心で楽しく歩いてあつという間に教会に到着。それぞれが前晩に決めた決意をもって聖年の扉をくぐり、共にミサに与って終了となった。

SYMではかねてより不定期で浜松教会を訪れ、外国人移住者の子どもたちとの交流と霊的養成を図っており、今回の巡礼はこの活動の一つの節目となった。これからもこの活動を継続させ、SYMとして滞日外国人支援に携わっていきたい。



中間地点の聖隷健康診断センターでの集合写真。みんな元気いっぱい!!



1日目の晩、ゆるしの秘跡前に山野内管区長の話を実録に聞く子どもたち。



みんな歩けば、雨だってへっちゃら! 楽しそうに歩く東京の青年と浜松教会の子どもたち。

2年半前に溝部司教様と出会ってから「キリスト教って何かな?」と思って、教会や勉強会など様々な活動に参加し始めた。数年前、望洋庵の友達に誘われて参加した全国の教会青年合宿は「楽しいキャンプ」の印象だったので、今回も楽しい思い出づくりの気持ちで参加したけど、みんなとお祈りして、歩いて、今までにない思いができた。特に、自分の心に素直になったり、弱みを見せたりすることが好きじゃなかったけど、1日目の夜、自分の罪を告白するとき素直に打ち明けることができて、2年半聖書を勉強する中でちゃんと神様と向き合えていたんだなあと思った。その気づきがあってよかった。

(20歳・女性・城星学園幼稚園OG)

SYM JAPANとは?

サレジオの教会^{*1}に所属する青年や、サレジオ家族の学校^{*2}の在校生・卒業生など、サレジオ家族にかかわる18～30歳の青年(高校生を除く)が、それぞれのグループの枠を超えて集まり、ドン・ボスコの精神を大切に若者らしい生き生きとした活動を行うムーブメントです! 主な活動として2か月に1回「SYMの集い」を開催し、ドン・ボスコの仲間とスポーツ・ミサ・食事・分かち合いをしています。

*1: 調布、下井草、三河島、足立、碑文谷、鷺沼、大和、津久井、浜松、野尻湖、鈴鹿、愛野、中津、別府にあるサレジオ会が受け持つカトリック教会。

*2: サレジオ小学校・中学校、サレジオ高専、サレジオ学院、日向学院、大阪星光学院、静岡サレジオ、城星学園、星美学園、目黒星美学園、都城聖ドミニコ学園高等学校ほか。

第10回「SYMの集い」は3月11日(土)
10:00～ 黙想会(東京・小金井 聖霊会黙想の家)
17:00～ SYMの集い(東京・調布サレジオ神学院)

詳しくは公式LINE@アカウントを追加してね!

公式LINE@アカウント

ID: @pzs3581nで検索、友達に追加してね!

SYM事務局
symjapan@salesians.jp



International Exchange 国際交流

『アジア高校生サミット in 宮崎』

ASIAN HIGH-SCHOOL SUMMIT in MIYAZAKI

日向学院中学校・高等学校
(宮崎県宮崎市)

日向学院中学校・高等学校(宮崎県宮崎市)で2016年夏、アジアの高校生とのサミットを開催。同窓生やサレジオ家族の姉妹校、地元企業の協力を得て実現した活気あふれる交流イベントを紹介します。

文・写真●日向学院中学校・高等学校

後輩たちに視野を広げる機会を

2016年7月31日～8月6日まで、「アジア高校生サミット in 宮崎」が、日向学院中学校・高等学校をメイン会場に開催されました。本校同窓生の原田俊彦さん(マキシオンホールズジャパン アジア担当副社長)が2015年のUMK(テレビ宮崎)高校生フォーラムにパネリストとして参加し、後輩たちに視野を広げる機会を提供したいとの思いが開催のきっかけでした。マキシオンの支社があるインド、タイ、中国の青少年を宮崎に招いて今回のサミットを行いました。サミットの開催を周知するために、本校同窓生で同じくフォーラムのパネリストであった(株)グリッツデザインの日高英輝さんがロゴマークをデザインしてくださいました。



入念な事前学習と交流

開催前年の2015年、この企画に参加したい生徒を高校1年生(当時)から公募し、ディスカッションに臨むメンバー11人と実施面を支える役員7人を決定。サミットの準備として学習会を行いました。まず、宮崎県商工観光労働部の永山英也部長から、宮崎県のグローバル化の現状、東九州メディカルバレー構想などについて講義を受けました。2回目は宮崎産業経営大学の田中賢一准教授から、宮崎県の経済の現状(アグロポリス21構想など)についての講義。3回目は本校同窓生の松本唯人さんから、インド、チェコ、ポーランド、ドイツでの旅行体験を聞き、質疑応答を行いました。

また、インターネットで4か国をつなぎ、各国代表による自己紹介や自国の文化・街並みを紹介するなどしてサミットの準備を行いました。



原田さん(同窓生、写真中央)のアドバイスを受けながら、プレゼンの準備をする学生たち。



生徒たちは、宮崎のよさや地元の企業の強みなどを活用することで地域が活性化し、さらには日本社会への大きな貢献につながるということを再認識しました。



文化や言葉の違いに驚きながらも、お互いの国についてもっと知りたいという気持ちをみんな持って、積極的に交流できました。

海の家でのディスカッションの様子。自分の考えを英語で伝えることの大変さと伝わったときの喜びを体験しました。



プレゼンテーションを終えて。各国代表者、スタッフ、企業の担当者、教師たちなど、多くの人たちの協力でサミットは大成功。

企業訪問、 高校生たちのプレゼンテーション

2016年7月30日、各国の代表(中国3人、インド5人、タイ4人)が宮崎に到着。翌日は2つのグループに分かれて宮崎県の企業を訪問しました。海外進出をしている(株)ソーラーフロンティア国富工場と(株)ヤマエ食品工業(都城市)です。その晩は、UMK(テレビ宮崎)主催の歓迎レセプションが宮崎観光ホテルで行われ、UMK社長の渡邊道徳さん(本校同窓生)をはじめとする同窓生たちの挨拶や、各国代表の紹介が行われました。最後に本校書道部の生徒たちが書道パフォーマンスを披露しました。

8月1日は本校記念館でオープニングセレモニーを行い、午後から「海の家」(日南市にある本校の宿泊施設)に移動して、ディスカッションを行いました。ディスカッションでは、企業訪問に基づき、その企業の製品や食品を自分たちの国(中国、インド、タイ)で商品化するには、どのような戦略や課題があるかを議論。翌日には、訪問した企業の担当者たちの前でプレゼンテーションを行い、高校生の視点から企業に提案をしました。ディスカッションを通して、グローバル化が宮崎という身近な地域で実現できることを実感できました。

ホームステイ、東京でも交流

アジアの学生たちは、本校生徒の家にホームステイをして交流を深め、翌日東京に移動し、サレジオ学院(神奈川県横浜市)に宿泊。さらに翌日には星美学園高等学校(東京都北区)および目黒星美学園高等学校(東京都世田谷区)の生徒と合同で1日交流会を行いました。その晩は、女子は星美学園の生徒の家庭に、男子は碑文谷教会と調布教会の信徒の家庭にホームステイ。8月5日の最終日には、在京の本校同窓生たちがガイドになり、浅草や渋谷などを案内しました。

今回のサミットを通して、アジアの高校生たちが周辺諸国とつながる体験をし、未来に夢をもって開かれていく、その一歩を踏み出したことは貴重な経験となりました。このような交流がやがて実を結び、若者たちの夢が世界に広がっていくことを願っています。



企業の担当者の前でプレゼンテーション。緊張で手足は震えましたが、人前で話す楽しさを知りました。



宮崎観光ホテルにてUMK(テレビ宮崎)主催の歓迎レセプション。中国代表の挨拶。



東京の浅草寺前にて。レンタル浴衣を着たタイの代表と本校同窓生たち。

学校

大阪星光学院ボランティア同好会 熊本地震被災地 復興ボランティアに参加



復興支援ボランティアをする大阪星光学院の生徒

2016年夏、大阪星光学院中学校・高等学校（大阪府大阪市）のボランティア同好会は、カリタスジャパンを通じて熊本地震被災地の復興支援ボランティア活動に参加した。初日は、南阿蘇村の東海大学周辺の被災地を訪問。倒壊したアパートや崩落した阿蘇大橋、土砂に埋まったまま放置された何台もの車や家屋、道路に残る巨大な亀裂など、その地震の大きさを思い知ることになった。2日目からは益城町、西原村、南阿蘇村の復興支援を手伝った。住宅の囲い壁の破碎、倒壊寸前の家の物品片づけ、溝掘り、避難所での手伝いなどを行った。瓦礫の集積場にははっきりなしにトラックが出入りし、コンクリートの破片や木片、家具、金属製品などが運び込まれていた。復興にはまだまだ人材、資金、時間が必要で、実行力のある行政の行動、より多くの人びとの関心も必要だ。私たちには何ができるのか自問を繰り返しつつ、少しずつでも支援を続け、輪を広げていきたいと願うボランティア体験となった。

目黒星美学園小学校 シリアと世界で苦しむ 子どもたちのための祈り

学校の聖堂で一緒に祈りを唱える
目黒星美学園小学校の児童

2016年10月、目黒星美学園小学校（東京都目黒区）では、カトリック教会の伝統で「ロザリオの月」とされる10月の1か月間、毎日朝礼前に、学校の聖堂に希望者の児童が集い、ロザリオの祈りを唱えた。特に、教皇フランシスコが10月18日「シリアで命の危険にさらされている10万人の子どもたちが救われるよう」全世界の子どもたちにロザリオの祈りを呼びかけたことを受け、熱心に祈りを捧げた。聖堂は児童であふれ、通路の床に静かに座って祈る児童も。それでも聖堂に入りきらず、小ホールでモニターを通して祈りに参加した児童もいた。この集いは、毎年、教員と共に宗教行事に協力する児童のグループ「聖母マリアの小さな使徒会（P.A.M.）」が呼びかけて行っている。祈りは、シリアや世界中で苦しんでいる子どもたちのために熱心に捧げられた。

サレジオ高専 東ティモールの生徒と 校長らが来日し交流



東ティモールの生徒とサレジオ高専の受け入れスタッフたち。カトリック浜松教会にて。

2016年11月16日から8日間、サレジ

オ高専（東京都町田市）が受け入れ機関となり、JST科学技術振興機構の採択事業である「さくらサイエンスプラン」を実施、東ティモールのドン・ボスコ工業高等学校ファトマカ校から5人の生徒と校長アドリアーノ修道士、マリアナ校から5人の生徒と院長ジョアオ・ロケ神父、通訳として現地でJICA専門家として働くサレジオ高専同窓生の辻村直さんが来日した。一行は来日前に教育大臣への訪日報告と在東ティモール日本大使館での事前勉強会を経て、サレジオ高専見学、日本信号株式会社見学、新幹線乗車体験、トヨタ自動車工場見学、着付け・茶道体験、カトリック浜松教会訪問などを行った。最終日には、在東京東ティモール大使アレシヨ閣下、元在東ティモール日本大使の北原閣下を招いてミニシンポジウムを行った。生徒たちは日本人の「勤勉さ・創造性・根気強さ」への気づきについて発表。充実した時間を過ごせた表情が印象深く残った。

サレジオ学院中学校・高等学校 南スーダンのためクリスマス街頭募金



募金活動にあたり南スーダンの現状を学ぶサレジオ学院の有志生徒

2016年12月、サレジオ学院高等学校（神奈川県横浜市）の有志生徒がクリスマス街頭募金を行った。今回集められた募金は、イエスのカリタス修道女会を通じて南スーダンの教育支援に送られる。募金の1か月前には有志生徒が多数集まり、南スーダンの現状を映像で学んだ。その後、高校2年生の有志を中心として活動グループを作り、募金活動の準備が進められた。

同窓生

扶助者聖母会同窓会 ウニオーネ山中のつどい開催

「ウニオーネ山中のつどい」の参加者たち。
山中修道院にて。

2016年9月24～25日、扶助者聖母会同窓会（ウニオーネ）本部は、サレジアン・シスターズ山中雪の聖母修道院霊性センター（山梨県南都留郡）にて「ウニオーネ山中のつどい」を開催した。関東一円5支部のウニオーネ会員18人が参加し、「同窓生のアイデンティティーについて」の武石聰子シスターの講話を聞いて考えを深め、活発な話し合いの時間を持った。2日目は雪化粧した富士山を間近に望みながら近隣の散策をして親睦を深め、さらなる活動への活力をいただく機会となった。

サレジオ同窓会連合 アジア・オセアニア地域大会に 代表団派遣



サレジオ同窓会連合アジア・オセアニア地域大会参加者。キリスト像がそびえる東ティモールのビーチで。

2016年10月4～8日、東ティモール・デイルでサレジオ同窓会連合アジア・オセアニア地域大会が開催され、11か国、約260

人が参加。日本からは7人の代表者が出席した。4年毎に開催され11回目となる今回は、同窓会のほかサレジオ家族代表も参加。テーマは「よい教育・経済的連帯・社会正義の促進により仲間と共に奉仕する」で、各団体の活動報告や交流、今後の課題の議論等が行われた。開会式ではフェルナンデス総長がビデオメッセージで「サレジオの学校で学び、心に刻まれた最高のものを互いに分かち合い、誠実な社会人として働く使命を果たすように」と激励。世界連合ホルト会長らが6か年戦略計画を紹介し、アジア地域での課題と目標が話し合われた。

東ティモールはサレジオ高専が20年以上にわたり交流を続けており、日本との絆も深い。独立までの悲慘な歴史を抱えつつも、同窓生がドン・ボスコの学校を創立・経営するなどして若者の教育に奉仕する姿勢に参加者は感銘を受けた。

翌週10月15日には同窓会日本連合の役員会がサレジオ会EAO地域顧問クレメンテ神父も同席し、サレジオ小学校・中学校（東京都小平市）で行われた。アジア大会の決議を受け、今後、同窓会青年部を立ち上げ、財政強化と持続可能な組織とするため法人化を進めること、2020年にアジア・オセアニア地域大会を日本で開催することとなった。

青少年

DBVG ドン・ボスコ 海外青年ボランティアグループ 25周年記念報告会



2016年夏にソロモン諸島に派遣されたメンバーによる報告発表

2016年10月22日、サレジオ宣教の日

にあたり、DBVGドン・ボスコ海外青年ボランティアグループの2016年度活動報告会がカトリック調布教会（東京都調布市）チマッティホールにて行われ、約60人が参加した。2016年夏のソロモン諸島での活動に派遣された8人の青年がリーダーの三島心神父とともに、活動を通しての気づきと感動、支援者の方々への感謝を分かち合った。

また、創立25周年を迎えたことを記念し、会場には25年間の各年度の活動の写真が展示された。そして、DBVGのOBでフィリピンで児童養護施設「ハウス・オブ・ジョイ」を運営する澤村信哉さんが講演し、得意の楽器演奏も交えながら、DBVGでの思い出や、現地の子どもの笑顔の様子などをユーモアたっぷりに語った。

祈りの集いでは、サレジオ会の山野内倫昭管区長が、DBVG創立者で2016年2月に帰天した溝部脩司司教や歴代のサレジオ会員たち、関わったメンバーのことを思い起こしながら、これまで25年間活動が重なってきたことを称え、DBVG活動での体験、出会いと別れを通して、一生続く夢をより強くもつことのすばらしさ、使命感をもって福音の喜びを伝えることの大切さを語った。

修道会・信徒の会

扶助者聖マリアの会（東京ADMA） いつくしみの特別聖年 浜松教会巡礼



東京ADMAの巡礼参加者。浜松教会でアンヘル山野内公司神父を囲んで。

2016年6月25～26日、東京ADMA会員の8人は「いつくしみの特別聖年」にあたり、カトリック横浜教区の巡礼指定教会である浜松教会（静岡県浜松市）を訪問。巡礼には、サレジオ会管区長の山野内倫昭神父と

サレジアン・シスターズの松本美恵子シスターが同伴し、よい心の準備をして「いつくしみの特別聖年」の全免償を得られるように導いた。浜松教会の主任司祭アンヘル山野内司祭による講話の後、参加者全員が「ゆるしの秘跡」を受け、自らも他の人びとに対して神のいつくしみを証しする者となるようにとの「決心」をしおりに記入。翌日、聖堂入口に特別に設けられた「聖年の扉」の前で短い講話を受け、扉をくぐった先に宣教者の保護者である小さき花の聖テレジアの聖遺物を手にしたアンヘル神父が待ち受け、聖水で清め祝福した。巡礼参加者は、喜びのうちに新たな心でミサにあずかり、巡礼の恵みを分かち合い、感謝した。また、浜松教会への巡礼に参加できなかった会員のために、9月に聖イグナチオ教会（東京都千代田区）への巡礼も行った。

サレジオ会 EAO地域顧問 クレメンテ神父が特別視察



クレメンテ神父（前列左）を囲んで。カトリック碑文谷教会のメンバーと。

2016年8月27日～10月18日、サレジオ会EAO東アジア・オセアニア地域顧問ヴァツラフ・クレメンテ神父が総長代理として特別視察のため来日。約2か月にわたり日本各地のサレジオの各事業所・支部を訪問し、大勢のサレジオ会員・教職員・生徒・協働者・青少年と出会い、語り合う時を過ごした。日本管区の今後6か年の新しいチャレンジを力強く励まされ、より豊かな活動の実りのために協働者も共に働いていく決意を新たに特別視察となった。

サレジアニ・コオペラトリー EAO地域東京大会 2017年5月開催に向けて



クレメンテ神父とユウ顧問を囲んで、サレジアニ・コオペラトリーの大会組織委員会会合の参加者。

2017年5月7～10日、東京で開催予定のサレジアニ・コオペラトリーEAO東アジア・オセアニア地域大会に向けて準備が進められている。2016年9月24日には、サレジオ会EAO地域顧問のヴァツラフ・クレメンテ神父と、コオペラトリーEAO顧問のフィリップ・ユーさんが同席し、サレジオ会日本管区本部（東京都新宿区）で大会組織委員会の会合が行われた。

大会は「Together, Come, for the Young（集まろう、若者のために）」をテーマに、EAO地域13か国から200人を超える会員が参加するほか、各国から青年も参加予定。とくに青年たちの参加費を支援するため、引き続き皆様からの経済的ご支援をお願い申し上げます。

《支援金振込先》りそな銀行調布支店
普通預金4542502 サレジアニ・コオペラトリー

サレジアン・シスターズ 協働者の集会を開催



サレジアン・シスターズ「協働者の集会」の参加者たち。山中修道院で。

2016年11月11～13日、サレジアン・シスターズの協働者の集会が、サレジアン・

シスターズ山中修道院（山梨県南都留郡）で開催された。サレジアン・シスターズの学校、施設、同窓会、VIDES（ボランティアグループ）、サレジアニ・コオペラトリーなど、各事業体から代表者38人が出席。初日は、各事業体の紹介、祈りの集い、親睦を深める時間が設けられ、互いを知る一日に。2日目は各事業体・教育現場から提出された課題を元にグループ討議と全体会が行われ、シスターたちも代表者たちの声に耳を傾けた。3日目の最終日は、各事業体の現場でこの集会の実りをどのように伝えるかななどをグループ討議。締めくくりに協働者を派遣するミサが行われ、昼食後に解散。好天にも恵まれ美しい富士山のふもとで、実り多い集会となった。

イエスのカリタス修道女会 新しいシスターたちが誕生



初誓願・終生誓願を立て、岡田大司教の祝福をいただくイエスのカリタス修道女会シスターたち。

2016年12月8日、無原罪の聖マリアの祭日に、イエスのカリタス修道女会日本管区本部（東京都杉並区）で誓願式が行われた。カトリック東京大司教区の岡田武夫大司教が司式し、大勢の神父、シスター、親族、友人、恩人が式に参列し、共に祈りを捧げた。初誓願を誓立した2人の新しいシスターはシンボルである十字架を頂き、ベールを身に着けた。また、3人のシスターが6年間の修道生活を経て、終生誓願を誓立。生涯を神と人びとへの奉仕に捧げることが誓った。参列者は、弱い人間にこのような崇高な思いを起こさせてくださる神の恵みに感謝し、シスターたちがその願いを生涯捧げられるよう、祈りのうちに見守った。これからも力を合わせて「カリタス・神の愛」を伝えていくことができますように。



2017年1月31日発行(年2回1月・7月発行)

編集人 関谷 義樹
発行人 山野内 倫昭
発行所 カトリック・サレジオ修道会
「ドン・ボスコの風」編集事務局
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12
電話:03-3353-8355 Fax:03-3353-7190
Eメール: dbw@salesians.jp
編集・デザイン制作 ドン・ボスコ社
印刷所 日之出印刷株式会社

本誌掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。
© カトリック・サレジオ修道会 2017

「ドン・ボスコの風」について

「ドン・ボスコの風」はサレジオ会創立者ドン・ボスコが1877年に創刊した「Bollettino Salesiano」の日本版。サレジオに関わる人びとの生き方や活動を紹介し、サレジオ家族の絆を深めるサレジオ会広報誌です。

本誌をご希望の方へ ご寄付のお願い

本誌をご希望の方は、上記奥付の「ドン・ボスコの風」編集事務局までお申込みください。本誌は無料配布ですが、趣旨にご賛同くださる皆様のご支援をお願いします。下記の振込口座まで（または本誌綴じ込みの払込用紙にて）ご寄付いただいた方には次号より1部贈呈いたします。

郵便振替口座番号 00100-7-412947

加入者名 「ドン・ボスコの風」編集事務局



次号No.19は 2017年7月発行予定です。

「ドン・ボスコの風」バックナンバーは、サレジオ会ホームページ <http://salesians.jp> (トップページの「ライブラリー」) → 「ドン・ボスコの風」) でご覧いただけます。

編集後記

今回、小誌はリニューアルいたしました。横書きで左綴じ、サイズも大きくして、より多く情報を載せられるようにいたしました。新コーナーも始まりました。ご意見をお聞かせください。今年のストレンナのテーマは「家族」です。小誌が、在校生とその家族、同窓生を含めサレジオ家族をつなげていくツールとして成長していけたらと思います。(S)

プレゼント
付き!

本誌へのご意見・ご感想、 サレジオ情報をお寄せください

本誌へのご意見やご感想、またサレジオ家族の学校・施設・活動グループ・教会・修道院での出来事の写真とコメントを、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・ご希望のプレゼント(下記A～D)を明記し、お送りください。

ご記入いただいた個人情報は賞品発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

応募締切 2017年3月31日

[Eメール] dbw@salesians.jp

[FAX] 03-3353-7190 (「ドン・ボスコの風」編集事務局宛)

[ハガキ] 〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12
サレジオ会日本管区本部 「ドン・ボスコの風」編集事務局

A ドン・ボスコ 若者にささげた生涯



平和や豊かさとは程遠い19世紀のイタリアで、貧しい若者のために生涯をささげ尽くしたドン・ボスコ。彼はなぜ神父の道を選び、困難の連続にもめげずに若者を救おうとしたのか。彼の生涯を、豊富な写真とともにわかりやすく紹介。

テレジオ・ボスコ 著／浦田慎二郎 監修／竹下ふみ 訳
新書判変形並製／71頁／ドン・ボスコ社

B フランシスコ教皇さまへ



世界の子どもたちが教皇へ宛てた30の手紙。子どもたちの描いた可愛らしいイラストと純粋で難しい質問に、フランシスコ教皇が心から、やさしくキチンと答えます。

質問と絵 世界の子どもたち／答え フランシスコ教皇／訳 片柳弘史
小学校低学年～／総ルビ付／H185×W185mm上製
72頁／ドン・ボスコ社

C 聖書とわたし



『クリスマスのはなし』『イースターのはなし』で人気のアリーダ・マッサーリの聖書絵本！旧約・新約聖書から、神さまによる救いの歴史を知る20のお話を収載。各お話の終わりに、聖書を引用したお祈り付き。

文 ロイス・ロック／絵 アリーダ・マッサーリ
日本語版監修 関谷義樹／訳 つばきうたこ
小学校低学年～／総ルビ付／H200×W213mm上製
128頁／ドン・ボスコ社

D ルポ 貧困女子



働くことも、結婚して子どもを産み育てることも期待されている、いまの女性たち。「一億総活躍社会」の掛け声の陰で、困難を抱えてひっそりと生き抜こうとがく女性たちの等身大の姿に迫る。

飯島裕子 著
新書判並製／240頁／岩波書店

(A～Cはドン・ボスコ社および一般書店、Dは全国の一般書店にて取扱可)

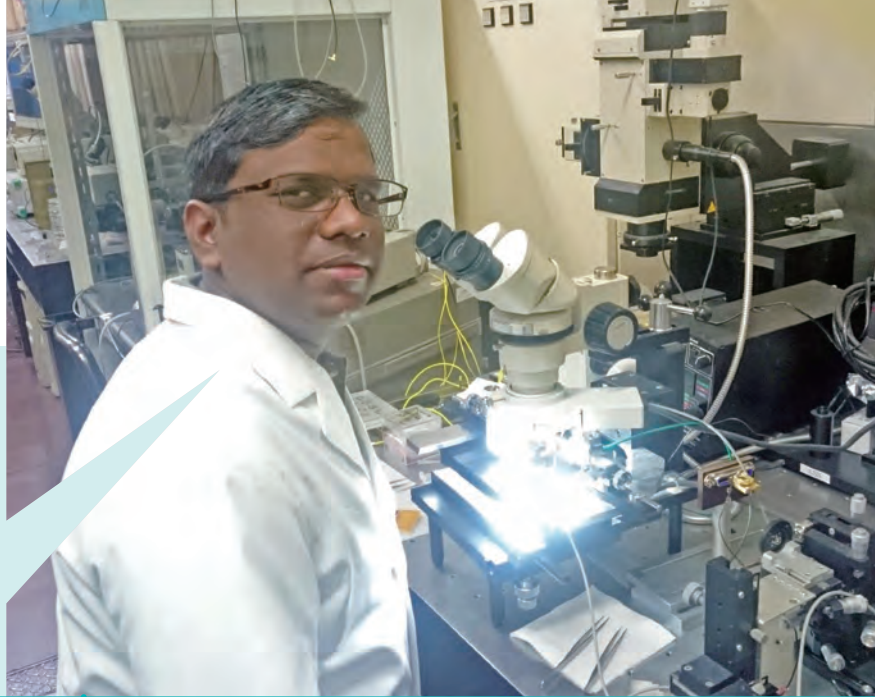
今、私「〇〇」しています！

サレジオ会司祭

ガンディ・カッラサン神父

Fr. Gandhi Kallarasan

「物理学の博士号」
をとるために
「勉強」しています！



上智大学理工学部の研究室で

どちらの出身ですか？

ワナッカム（こんにちは）！ 私はガンディ・カッラサン神父です。34歳です。インドのサレジオ会チェンナイ（マドラス）管区から日本に来ました。サレジオ会員400人以上の大きな管区です。母国語はタミール語です。私の名前のkallarasanはタミール語で岩の王という意味で、クリスチャンネームはペトロになります。



母国インドにて母と

私の家は先祖代々カトリックです。9人の兄弟姉妹（男5人、女4人）で私は8番目です。父と母は愛情深い人たちでした。特に父は祈り深い人で、父から学ぶところがたくさんありました。

私は小さい頃から神父になりたいという気持ちを持っていました。父や兄たちがサレジオ会の学校の卒業生だったこともあり、サレジオ会の召命キャンプに参加したことがきっかけで、8年生（日本でいう中学2年生）のときからこの道に進みました。

今、日本で何を？

2015年の9月から3年間、東京・四谷にある上智大学の理工学部英語コースの物理学博士課程で学んでいます。物理には小さい頃から興味がありました。インドでイエズス会のロヨラ大学で物理を修士課程まで勉強したことがきっかけで、3年間の日本の奨学金をいただき上智大学で学ぶチャンスを得ることができました。現在、応用物理の分野で、半導体について学び、とくにレーザーダイオードの研究をしています。実験がとて多く大変です。失敗に失敗の連続

で、何日もやり続けて、最後に結果が出ないことがあります。でもとても多くのことを学んでいます。

物理は忍耐と努力が必要ですが、おもしろい学問です。科学的なことを知れば知るほど、神様が見えてきます。この宇宙万物の秩序の中に、パウロがローマの信徒への手紙8章19～20節で言うように、神様の造られた被造物の姿を見ているように感じます。

いずれインドに戻って物理学をより専門的に教えることになると思いますが、その前に博士号を取るためには最後に論文を出さなければなりません。段階的には前進していますが、今現在、残り1年半と少ししかありません。お祈りください（笑）。

日本の若者にメッセージを

まず科学を志す若者たちへのメッセージとして、私が考える3つの大切なことは、①特定の分野に興味をもつこと、②その分野に全面的に集中すること、③情熱と忍耐をもって続けることだと思います。

次に自分の経験から信じているのですが、神様に近づけば近づくほど幸せになれるということ。物質的なものは幸せにさせてくれないということです。若いときは、いろんなことに好奇心があっているいろんなことに目が行くので、このことがピンとこないかもしれませんが、キリストを知るようになれば、キリストは幸せと平和に導いてくださるでしょう。



ガンディ・カッラサン
Gandhi Kallarasan

1982年インドのタミルナドゥ県（県都はチェンナイ）のネリーアンフランに生まれる。2001年サレジオ会入会。2013年司祭叙階。2015年来日。現在、上智大学理工学部英語コースの物理学博士課程に在籍。趣味は音楽。インドにはない柿が好物に。

Salesian Life Story

サレジオンライフストーリー ドン・ボスコのように生きる



ありがとう！ 古木真理一神父 大らかで情に熱い人

2016年6月8日、サレジオ会司祭 ヨセフ 古木真理一神父が、長崎県愛野町 愛野中央病院で帰天された。2015年5月末から長崎県外海にあるイエスのカリタス修道女会の修道院の司祭館へ移り、がん治療をしていた矢先だった。十字架を背負って歩いた話や25歳で高校へ入った話など、司祭への道のりはとても個性的だ。青少年に向かう大らかさと様々なことに情熱を傾ける姿は、多くの人の記憶に残っている。

（編／サレジオ会・編集部）



がん治療中に撮影されたポートレート

わたしは、戦いを立派に戦い抜き、
決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。
今や、義の栄冠を受けるばかりです。

（テモテへの手紙二4章7～8節）

古木師は福岡県行橋市のカトリック信者の家庭で生まれ育ちました。9人兄弟（男4人、女5人）の上から2番目の長男で、幼稚園生から、年上の小学生を待ち伏せして泣かすくらいの親泣かせなやんちゃ者でした。小学校高学年になると、先輩の不良仲間目につけられるようになり、それを心配した親や周りの大人が、彼を守るために大分県中津市のドン・ボスコ学園（現聖ヨゼフ寮）へ彼を入園させ、中学校までをここで過ごします。

中学校を卒業後、大分県中津市で働きながら、教会の青年会で活動していた時、大分教区の青少年司牧担当をしていた故溝部脩司教（当時神父）から「司祭にならないか」と声をかけられたのが司祭を目指すきっかけとなりました。なれるわけがないと思っていた彼の心は大きく揺さぶられ、その後の家での病気療養中に「試してみよう」と決意します。そのために一つの試練を自分に課します。「大きな十字架を背負って歩いてみよう。そんな恥ずかしくてつらいことを耐えることができれば、司祭への召命があるのかもしれない」。そして中津市から大分市の大分教会（カテドラル）までの約70kmを、国道10号線を通して手製の重い木の十字架を担いで運び切ります。これを機に決意を固め、当時神奈川県川崎市にあったサレジオ志願院（小神学校）で25歳の高校生となりました。苦学の末、1987年3月7日に司祭叙階の恵みを受け、念願の司祭となりました。

司祭叙階後は、宮崎の日向学院の寮長、東京の育英高専の事務、大分大学のそばにあったサレジオスタディセンター担当、そして愛野教会の主任司祭と小さき花の幼稚園の園長を務めました。2011年から長崎教区に出向し、東日本大震災後、岩手県の大槌町にあるカリタス大槌ベースで復興センター長として活躍しました。2014年から時津教会に主任司祭として赴任していました。

2015年春、体調を崩して長崎大学病院で検診を受けたところ、肺に悪性のがんが見つかりました。抗がん剤の治療は大変な苦しみを伴いましたが、すべてが神のみ旨であることを受け入れ、その力を信じ、治療に努めていました。2016年6月8日、外出先で体調が急変。肺栓塞炎のため帰天されました。

手先の器用な人で、消しゴム彫刻、散髪、絵など上手でした。運動神経がよく、どんなスポーツでもこなしました。車の運転も好きで、毎年夏、長野の野尻湖で行われる聖書学校に子どもたちを連れていたりもしていました。

青少年たちの中に入り、彼らの心をつかみ、なにより難しい子どもたちを受け入れ、導くセンスに秀でていた人でした。近隣の学校の先生たちからの信頼も厚かったときます。また、この人とは思ふ青年には声をかけ、奉獻生活の召命の道を示し、同伴もしました。

がん治療中も、他の人には深刻な顔や不安を絶対に見せず、常に司祭としてふるまっていました。そして亡くなる1か月前、長崎教区と契約を解除してサレジオ会の支部に戻る準備をしていました。「サレジオ会員としてだけ生きたい。サレジオ会員だから」と。

ヨセフ

古木 真理一

ふるき まりかず

1949年10月30日福岡県行橋市生まれ。1987年3月7日司祭叙階。サレジオ会の学校などで奉職。1999年より愛野教会主任司祭、小さき花の幼稚園園長。2011年より長崎教会管区カリタス大槌ベース長、長崎教区事務局次長。2014年より時津教会主任司祭。2016年6月8日帰天。修道生活37年、司祭生活29年。享年66歳。



We are FAMILY!

Every home, a school of Life and Love

Strenna 2017

サレジオ家族 年間目標

「わたしたちは家族! “家庭”は命と愛の学び舎」

私たちは皆、家庭に生まれ、そのふとところで成長し、おとなになります。家庭は、私たちが愛されていると実感し、優しさを体験し、感謝すること、ゆるしを願うことを学ぶ生活の場です。

家庭そのものにすばらしい象徴的価値があります。神は私たちと共にいるために、たぐいえない女性マリアを母として選び、神の子イエスが家庭の中で人として成長することを選ばれたのです。

サレジオ家族には家庭的精神が備わっています。私たちは、家庭と出会い、生活を分かち合い、家庭のために働くよう招かれています。多くの家庭が痛ましい状況にあります。深刻な危機の中にある人びとに共感し、理解し、寄り添う力を大きく育てましょう。回復し、築き上げるために共にいるのです。

家庭は、命と愛の学び舎です。親にとって大きな責任ですが、生き生きと充実したコミュニケーションを心がけましょう。家庭の安らぎの中で、自由・責任・主体性・連帯などの価値を受け取るなら、自分を大切にしながらも共通善を求めるようになります。

家庭が、対話・理解・優しさ・成長に配慮する生活の場となる時、感謝と愛の旅を共に歩む体験となると、家庭は真の救いの体験となるでしょう。家庭は、私たちを救うのです。

2016年10月 モンゴルの子どもたちとフェルナンデス総長



[Signature]
R.H.

サレジオ会総長

アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父

ストレンナ2017ビデオメッセージより要約